

大毛沖遺跡出土の墨書陶器

小池一徳

1. はじめに

大毛沖遺跡の発掘調査は1993年に始まり、現在遺跡全体のほぼ80%まで進行している。これまでに167点の墨書陶(土)器が出土している。その形態等の内訳は後に詳述するが、その主体は灰釉系陶器であるので、本稿では「墨書陶器」の語を主に用いることにする。墨書された文字は、各地の集落遺跡の場合と同様に1字のみのものが主体を占め、しかも判読困難なものが多い。これらの墨書陶器について、墨書された文字の意味究明のみを第一義とするのではなく、あくまでも出土した遺構等との関わりでとらえ⁽¹⁾、ひいては大毛沖遺跡の全体像を明らかにしていく一助とするのが本稿の目的である。

なお、墨書された文字の判読については名古屋市博物館の下村信博氏、須恵器及び灰釉陶器の年代観については文化庁の斎藤孝正氏、灰釉系陶器の年代観については、愛知県埋蔵文化財センターの池本正明氏のご教示を得た。

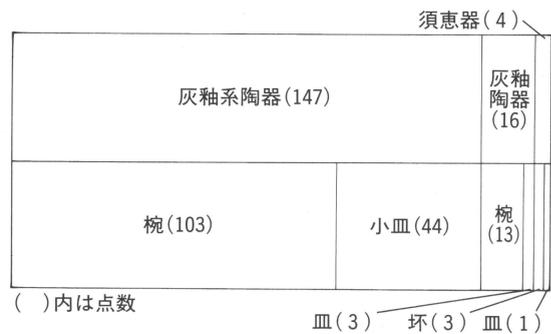
2. 大毛沖遺跡の概要

大毛沖遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曾川町にかけて所在し、木曾川によって形成された標高9m前後の自然堤防上、及び後背湿地に広がりが認められる遺跡である。本遺跡は、そのほぼ中央を北東方向から南西方向に流れた、幅16m・深さ70cmを測る旧河道との深い関わりの中で展開した、古代から中世にかけての遺跡である。すなわち、左岸域において奈良～平安時代の竪穴住居群と、鎌倉～室町時代の溝によって区画された居住域とが営まれ、流路が埋没した後、旧河道上を中

心に鎌倉～室町時代の墓域が形成された。また、右岸域においては室町時代～戦国期の、周囲に溝を巡らせた集落あるいは屋敷地等の居住域が展開されている。

3. 墨書陶器の検討

(1) 概要



第1図 墨書陶器の種類

大毛沖遺跡で出土した墨書陶器の種類や数量は第1図に示したとおりであり、灰釉系陶器が147点出土し、全体の88%を占めている。また、器種についても灰釉系陶器の椀が103点出土し、全体の61.7%を占めている。本遺跡の遺物は未整理の段階であるが、これらの比率は本遺跡の出土遺物の全体的傾向にほぼ対応するものと思われる。

本遺跡で出土した墨書陶器の墨書部位は、底部外面が圧倒的に多い。底部内面・外面の両面に墨書したものが2点出土したが、内訳は須恵器の皿と灰釉陶器の椀であり、年代的にも他の墨書陶器に対してやや異質である。この他体部から底部にかけてその内面に夥しく墨痕の残るものが1点出土したが、これは転用硯の可能性も考えられる。体部外面に墨書したものは、灰釉系陶器の椀がわずかに1点のみ出土した。

遺物番号	文字	器種	時期	墨書部位	調査区	グリッド	遺構	備考	遺物番号	文字	器種	時期	墨書部位	調査区	グリッド	遺構	備考
1	油子?	灰釉系碗	13後半~14	体部外面	93A	VH5 n	SX01	北部系	86	めorぬ	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93F b	WH6 g	SD13	北部系
2	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93A	VH5 n	SX01	南部系	87	金	灰釉碗	10	底部外面	93F b	WH8 g	SD08	虎渡山1
3	まつ	灰釉系小皿	13前半	底部外面	93A	VH5 n	SX01	南部系	88	?	灰釉系碗	13前半	底部外面	93G	VG1 c	SE04	南部系
4	□	灰釉系碗	13前半	底部外面	93A	VH5 n	SX01下層	南部系	89	?	灰釉系碗	12後半	底部外面	94C a	VG17-18 c	SK12	南部系
5	□	灰釉系碗	12~13初	底部外面	93A	VH5 n	SX01下層	南部系	90	?	灰釉碗	10	底部外面	94C a	VG18 e	NR01	虎渡山1
6	□	灰釉系碗	13前半	底部外面	93A	VH5 n	SX01下層	南部系	91	□	灰釉碗	10	底部外面	94C a	VG15 f	NR01	S27
7	一	灰釉系碗	13前半	底部外面	93A	VH6 e・m	SK06	南部系	92	十	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94C a	VG17 c	(包含層)	北部系
8	大	灰釉系碗	12前半	底部外面	93A	VH6 e	SK06	南部系	93	⊕or⊗or田	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94C a	VG13 d	(包含層)	北部系
9	?	灰釉系碗	13前半	底部外面	93A	VH5 n	SK53	南部系	94	か?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	94C a	VG16 e	(包含層)	北部系
10	一	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93A	VH13 p	(包含層)	北部系	95	□	灰釉碗	9	底部外面	94C a	VG18 e	(包含層)	光ヶ丘1
11	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93A	VH8 m	(包含層)	北部系	96	□	灰釉碗	9	底部外面	94C b	VG14 i	SK21	光ヶ丘1
12	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93A	VH9 l	(包含層)	北部系	97	大□?	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94C b	VG15 j	(包含層)	南部系
13	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93A	VH9 o	(包含層)	北部系	98	大田	灰釉碗	10	底部外面	94C b	VG13 k	(包含層)	虎渡山1
14	?	灰釉系碗	13前半	底部外面	93B	VH12 t	(包含層)	南部系	99	大田	灰釉碗	10	底部外面	94C b	VG13 l	(包含層)	虎渡山1
15	の	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93B	WH110-a	(包含層)	北部系	100	まつ	灰釉系小皿	13前半	底部外面	94C c	WG2 o	SK58	南部系
16	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93B	WH9 s	(包含層)	北部系	101	上大□	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94C c	WG1 p	SK55	南部系
17	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93B	WH11 b	(包含層)	北部系	102	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94E	VG11 e	SD05	北部系
18	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93B	WH18 a・b	(包含層)	北部系	103	○	灰釉系碗	13前半	底部外面	94F	VG13 t	(包含層)	南部系
19	?九?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93C a	WH16 m	SK05	北部系	104	○	灰釉系小皿	13前半	底部外面	94F	VG15 d	(包含層)	南部系
20	万?	灰釉系碗	13後半	底部外面	93C a	WH17 l	SK06	南部系	105	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94F	VH16 b	(包含層)	北部系
21	四?	須恵坏	8	底部外面	93C a			老洞	106	⊕or⊗	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94F	VH16 c	(包含層)	北部系
22	□	灰釉系碗	12~13初	底部外面	93C b	WH9 i	(包含層)	南部系	107	?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	94F	VH16 d	(包含層)	北部系
23	十	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH1 f	(包含層)	北部系	108	⊕?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94F	VH17 b	(包含層)	北部系
24	□	灰釉系碗	(不明)	底部外面	93D	WH2 c・d	(包含層)	北部系	109	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94F	VH17 a・b	(包含層)	北部系
25	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 c・d	(包含層)	北部系	110	?	灰釉碗	10	底部外面	94F	VH17 c	(包含層)	虎渡山1
26	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 c・d	(包含層)	北部系	111	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94F	VH17 d	(包含層)	北部系
27	れ	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	112	灰?	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94F	VH17 e	(包含層)	南部系
28	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	113	□	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94F	VG18 t	(包含層)	南部系
29	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	114	?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	94F	VG19 t	(包含層)	北部系
30	の	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	115	光?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94F	VG18-19 s	SK06	北部系
31	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	116	?	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94F	(南部分)	(包含層)	南部系
32	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	117	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94F	(南部分)	(包含層)	北部系
33	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	118	正□	灰釉系碗	12~13初	底部外面	94F	(南部分)	(包含層)	南部系
34	の	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	119	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94F	(南部分)	(包含層)	北部系
35	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	120	上	灰釉系碗	13前半	底部外面	94H a	III g 9 n	SD07	南部系
36	の?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	121	上	灰釉系碗	13前半	底部外面	94H a	III g 9 n	SD07	南部系
37	の	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	122	十	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H a	III G14 o	SE01	北部系
38	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 e	(包含層)	北部系	123	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H a	III G14 o	SE01下層	北部系
39	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 f	(包含層)	北部系	124	?	須恵坏	9	底部外面	94H a	III G15 o	O10~1 G78	
40	□上	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 g	SD02	北部系、花押風	125	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94H a	III G14 o	SE01下層	北部系
41	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 h	(包含層)	北部系	126	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94H a	III G 9 n	SE03	北部系
42	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 h	(包含層)	北部系	127	首	灰釉碗	10	底部外面	94H a	III G14 q	(包含層)	虎渡山1
43	?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	93D	WH2 h	(包含層)	北部系	128	公	須恵坏	8	体部外面	94H a	III G14 q	(包含層)	老洞
44	めつ?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 j	(包含層)	北部系	129	の?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94H a	III G 9 n	SE02	北部系
45	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH2 r	(包含層)	北部系	130	○	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H a	III G14 p	SK145	北部系
46	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH2 r	(包含層)	北部系	131	○	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H a	III G 9 k	SX01	北部系
47	?	灰釉系碗	12~13初	底部外面	93D	WH3 d	SD08下層	南部系	132	○	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H a	III G14 p	(包含層)	南部系
48	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH3 d	(包含層)	北部系	133	○	灰釉系碗	13前半	底部外面	94H a	III G 9 o	(包含層)	北部系
49	三or川	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH3 e	(包含層)	北部系	134	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H20 g	SE03	北部系
50	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH3 f	(包含層)	北部系	135	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H20 g	SD12	北部系
51	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH3 h	(包含層)	北部系、花押風	136	一?	灰釉系碗	13前半	底部外面	94H b	III H20 g	SD12	南部系
52	△s?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH3 i	(包含層)	北部系、花押風	137	?	灰釉系碗	13前半	底部外面	94H b	III G18 r	SD03	北部系
53	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH3 i	(包含層)	北部系	138	大	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H20 f	SE02	北部系
54	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH3 o・p	(包含層)	北部系	139	公	須恵皿	8	底部外面	94H b	III H17 a	NR01	美濃須衝
55	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH4 e・f	(包含層)	北部系、花押風	140	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H20 g	(包含層)	北部系
56	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH4 f	SD01	北部系	141	一?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H19 j	(包含層)	北部系
57	上	灰釉系碗	13前半	底部外面	93D	WH4 l	(包含層)	南部系	142	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b	III H19 g	(包含層)	北部系
58	?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	93D	WH5 d	(包含層)	北部系	143	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
59	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH5 e	(包含層)	北部系	144	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
60	悦?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH5 i	(包含層)	北部系	145	⊖?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
61	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH5 k	(包含層)	北部系	146	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
62	十?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH5 k	(包含層)	北部系	147	?	灰釉系碗	(不明)	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
63	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH6 e	(包含層)	北部系	148	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94H b		(表土掘削)	北部系
64	○	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH6 e	(包含層)	北部系	149	?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94D	VG11 g	(包含層)	北部系
65	れ?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH6 g	(包含層)	北部系	150	三or川	灰釉系碗	13前半	底部外面	94D	VG8 g	(包含層)	南部系
66	六?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH6 g	(包含層)	北部系	151	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94D	VG8 h	(包含層)	北部系
67	?十?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH6 h	(包含層)	北部系	152	火?口?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94D	VG8 h	(包含層)	北部系
68	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH6 h	(包含層)	北部系	153	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94D	VG8 i	(包含層)	北部系
69	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH6 h	(包含層)	北部系	154	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	94D	VG8 i	(包含層)	北部系
70	□	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH6 h	(包含層)	北部系	155	?	灰釉系碗	12~13初	体部・底部内面	94D	VG9 h	(包含層)	北部系・転用規?
71	ま?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	93D	WH6 i	(包含層)	北部系	156	?	灰釉系小皿	13後半~14	底部外面	94D	VG5 j	(包含層)	北部系
72	□	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH11・2・k	SD04	北部系	157	金?	灰釉碗	10	底部外面	94D	VG11 l	(包含層)	虎渡山1
73	の?	灰釉系碗	13後半~14	底部外面	93D	WH11・2・3 g	(包含層)	北部系	158	?	灰釉系碗						

墨書の文字数は90%以上が1文字で、2文字ないし3文字のものがわずかに出土し、4文字以上のものは出土しなかった。そしてほとんどの墨書陶器が小片で、しかも墨痕が薄れているため、その判読は極めて困難なものが多い。しかし、出土した墨書陶器の数量の多さは、墨書という行為がより広くなされたことを物語っており、詳細な検討が必要だと考える。

(2) 年代観

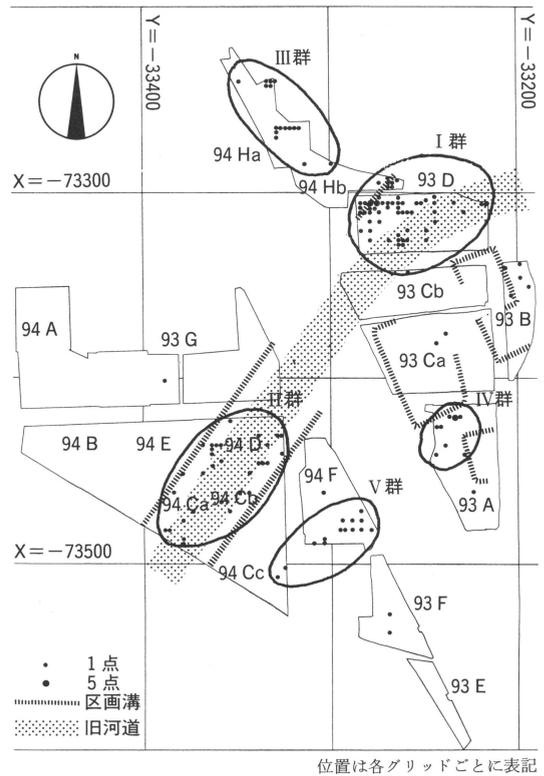
147点に及ぶ灰釉系陶器について、藤沢良祐氏の編年(藤沢1994⁽²⁾)に基づいて整理すると、①第3型式～第5型式を中心とした南部系の灰釉系陶器(12世紀～13世紀初頭)、②第6型式を中心とした南部系の灰釉系陶器(13世紀前半)、③第7型式～第10型式の北部系の灰釉系陶器(13世紀後半～14世紀)に分類できる。この三者の割合は、①が約10%、②が約15%、そして③が約75%を占めている。したがって、墨書が最も広く行われた時期は③の時期と考えることができる。また、各灰釉系陶器の高台部分の摩耗が進んでおらず、使用した痕跡があまりないものが多く、概して一過性の使われ方をされ、その後廃棄されたことも想定できる。

16点出土した灰釉陶器については、虎溪山1号窯式(10世紀)のものを主体とし、光ヶ丘1号窯式(9世紀)及び篠岡27号窯式(10世紀)のものが出土した。

4点出土した須恵器については、美濃須衛老洞窯段階で生産されたと思われるものが主体を占めている。

(3) 性格

墨書された文字が判読できるものは全体の40%程度であるが、出土した遺構・区域との関わりを見ながら、特徴的な墨書内容について検討してみ



位置は各グリッドごとに表記

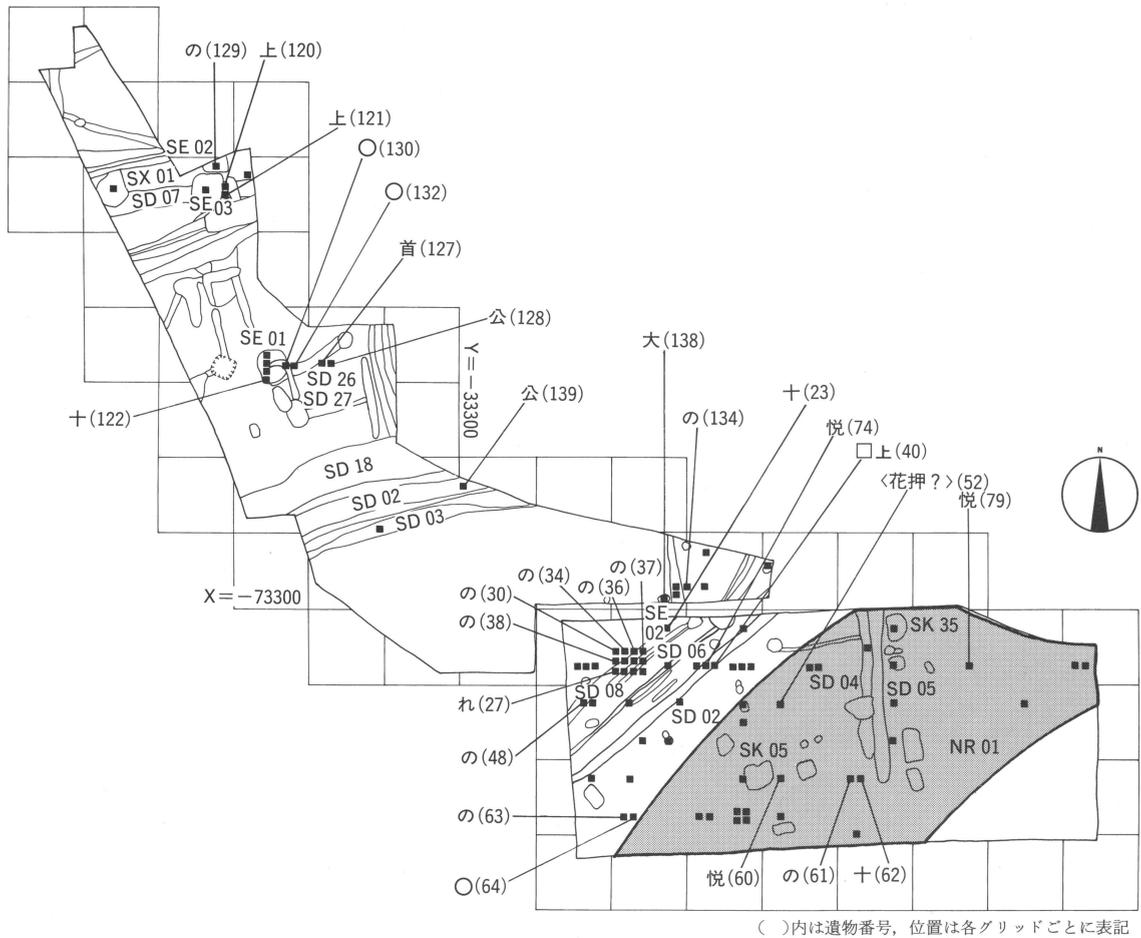
第2図 墨書陶器出土位置図 (1:4000)

たい。ただし、全体的に遺構に伴う墨書陶器が少なく、遺構検出段階で出土したものが多く。このことは墨書陶器に限らず、本遺跡から出土した遺物全体にも共通していえることでもあるので、遺構直上及び周辺の包含層から出土したものについても考慮していきたい。

墨書陶器の出土地点について、その特徴を見てみると、第2図に示したようにI～Vの5つの群でとらえることができる。ただし、I群とII群については、いずれも旧河道N R01に直接関わるものと想定すれば、似通った性格を有するひとつのまとまりと考えることもできる。各群ごとに墨書陶器の性格について検討していきたい。

[I群]

本遺跡全体を通じて、判読できた墨書の中で最も多く見られたのは「の」である。推定したものを含めると12点に及ぶ。「の」を墨書したが陶器が



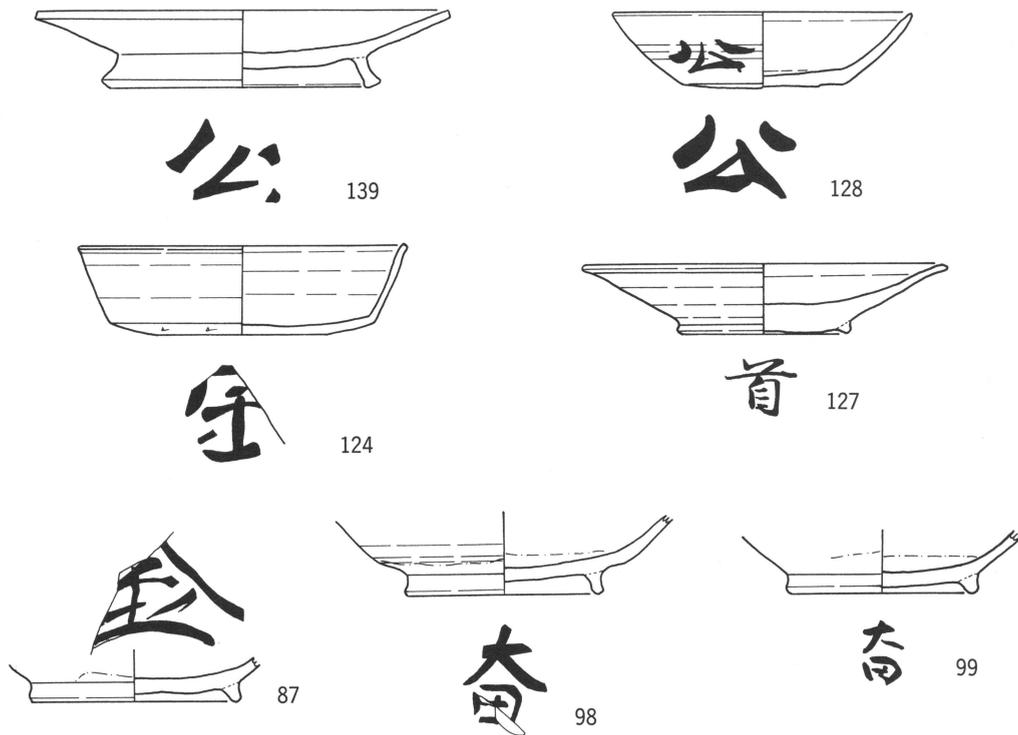
()内は遺物番号，位置は各グリッドごとに表記

第3図 93D区・94H区墨書陶器出土位置 (1:1000)

出土した範囲は93B・D区、94Ha・Hb区に限られている。これはI群を中心として、本遺跡中最も多数の墨書陶器が集中して出土した区域である。そして、その中でも特に「の」を墨書した陶器が集中したのは、93D区のSD08上の包含層である。SD08は幅約1.2m・深さ約30cmを測り、遺物は灰釉系陶器がほとんどを占める。この溝は旧河道の両岸に巡らされた13～15世紀の溝の一つで、右岸に位置し、洪水によって埋まっては掘り返した形跡もうかがわれるが、旧河道を区画するものと考えられる。この溝を中心に出土した「の」と墨書された陶器は、すべて13世紀後半～14世紀の北部系の灰釉系陶器で、椀(10点)と小皿(2点)の底部外面に墨書されており、概して整った筆跡

となっている。しかし、「の」と判読したものの中に「の」・「ぬ」・「ぬ」の3つのパターンが認められる。このような字体の違いはそれぞれを識別するために意図的に使い分けたことによるか、あるいは文字の普及過程に起因するものと思われる。また、そもそも同様の墨書陶器が一定の区域で出土したことは、その区域にまとまりを持つ一定の人間集団が存在したことを物語るものであろう⁽³⁾。「の」という語の意味については、さらに謎が深い。「の」に始まる人名・地名等を省略したものとも考えられる。

「の」と同じく、I群で多く出土したものとして「悦」(4点)及び花押風の墨書(4点)をあげることができる。「悦」については93D区のSD02、



第4図 墨書陶器実測図Ⅰ（須恵器・灰釉陶器）（1/3）

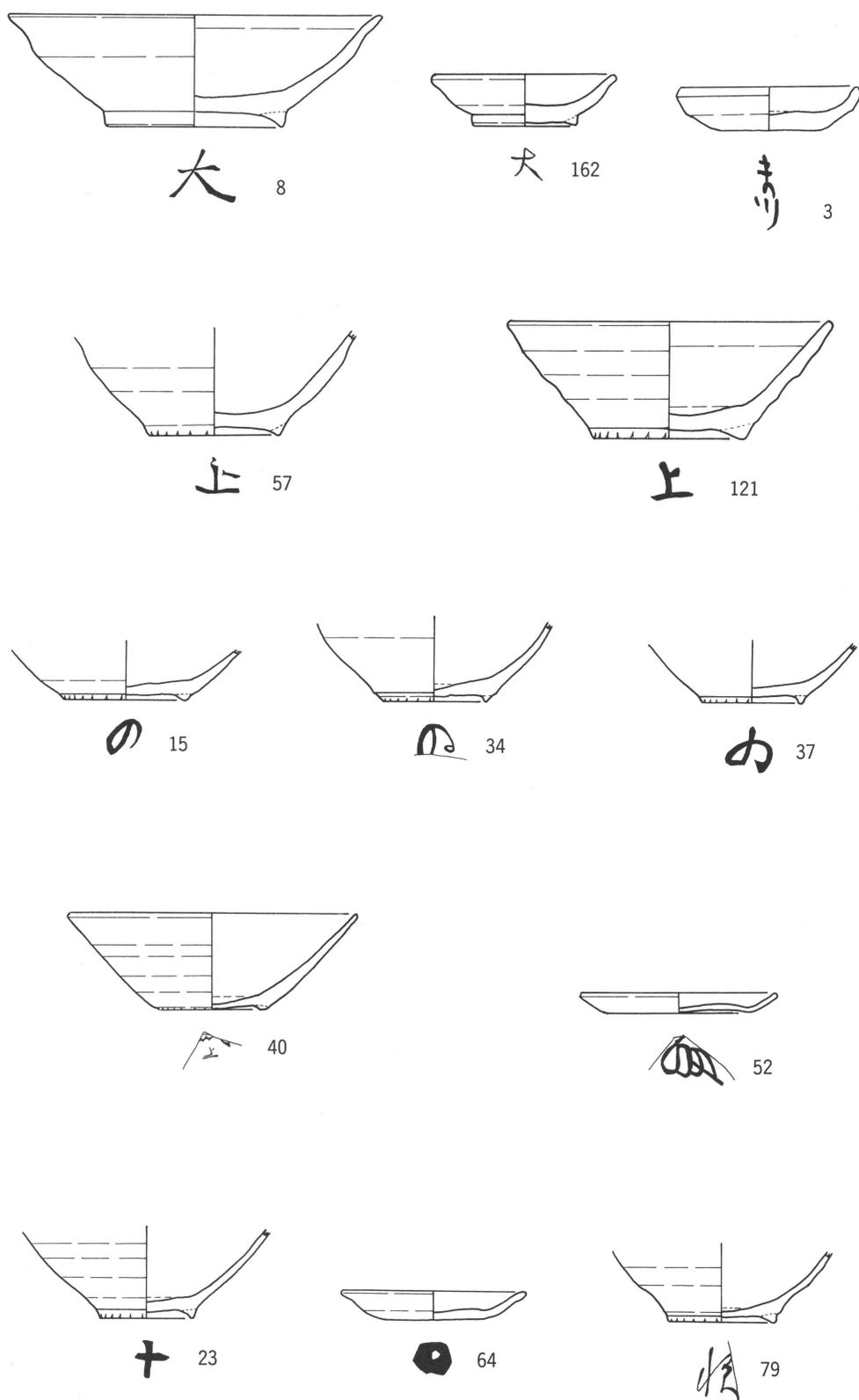
及びその周辺を中心に出土した。S D02は幅約1.3 m・深さ約30cmを測り、遺物は13世紀後半～14世紀の北部系の灰釉系陶器を主体とする。性格はS D08と同じく、旧河道との区画を意図したと思われる溝である。「悦」は同一人物によって書かれたと思われるほど酷似しており、いずれも細い筆で書かれ、筆運びも滑らかな草書体で書かれている。「悦」の字義からすれば吉祥句として用いられたのかもしれない。

花押風の墨書は4点とも異なる内容のもので、しかもすべて小片であり、それぞれの全体をとらえることはできない。そのうち52の花押らしきものは、いかにもたどたどしい筆跡である。40についてはわずかな部分しか見ることはできないが、書き慣れたものであることがうかがわれ、また花押らしきものの下に小さめの字で「上」と墨書されている。これらの花押風の墨書については、どのような階層の人物によるものか現段階では不明

であるが、大毛地域における領域支配の問題との関連でも興味深い。

〔II群〕

II群に特有な墨書内容としては、「大田」をあげることができる。これについては農耕儀礼との関わりがよく指摘されるが⁽⁴⁾、本遺跡ではII群から3点が出土した。3点すべて虎渓山1号窯式の灰釉陶器の底部外面に墨書されており、本遺跡で出土した墨書陶器の中ではかなり早い段階に現われたものといえる。書体はそれぞれで異なっているが、出土地点はいずれも旧河道の左岸域である。旧河道N R01については先にも簡単に触れたが、河道が東（左岸の側）へ移動したことにより、9～13世紀にかけて河跡湖へと変容し、やがて中世末段階に埋没していったものである。これらの墨書陶器はその出土層位からも墨書の時期を10世紀と想定することができる。これと同じ層位では、近接した地点で馬の下顎骨が2点出土している。また



第5図 墨書陶器実測図2 (灰釉系陶器) (1/3)

やや離れるが、旧河道の上流部にあたる93D区において、先に触れたS D08の下層で束状の藁と馬の頭部と思われる骨が出土している。これらは、旧河道の周辺において何らかの祭祀が行われたことを物語るものであろう。

旧河道左岸域では、灰釉陶器の椀の底部内面と外面の両面に「金」と墨書したものが出土した。内面に墨書があることから、食膳用以外の目的で使用されたものであろう。「金」と墨書した灰釉陶器はもう1点、93F区のS D08で出土している。S D08は幅約2m・深さ約70cmで断面はV字形を呈した溝であり、11～12世紀の須恵器や灰釉陶器が出土している。「金」の意味は人名もしくはその省略形、または吉祥句的な性格も考えられる。

[Ⅲ群]

本遺跡における最も早い年代の墨書土器は、わずかな点数ではあるがⅢ群で出土している。判読できるのは坏の底部外面に「公」と墨書した須恵器と、皿の底部外面及び内面に同じく「公」と墨書した須恵器である。いずれも美濃須衛古窯で生産されたものと思われ、筆跡も類似している。また、皿の底部外面に「首」と墨書した灰釉陶器も出土した。特にこの「首」は、際立って端正な楷書で美しい筆跡である。この3点は他の墨書陶器に対して、明らかに異質である。判読できない墨書を施した須恵器の坏も出土しているが、これらは94H a区の包含層及びH b区下面のN R01から出土した。「公」・「首」ともに官衙との関わりを匂わせる語でもあるが、人名もしくはその一部とも考えられる。本遺跡の北西に隣接し、「美濃国」施印須恵器を含め美濃産の須恵器を多く出土した大毛池田遺跡のうちの94E区で体部外面と底部内面に「公平」と墨書した、美濃須衛古窯で生産されたとされる須恵器が出土したことは、遺跡間の関係を考える上で注目すべきである。

Ⅲ群とした区域から出土した墨書陶器は、先に

述べた3点を除くと北部系の灰釉系陶器がほとんどを占め、「上」・「十」等の墨書が見られる。94H a・H b区から大毛池田遺跡にかけて、15世紀後半～16世紀初頭にかけての大規模な区画溝が検出されている。墨書陶器も類似したものが両者で出土しており、この時期についても大毛池田遺跡との関係に留意する必要がある。

[Ⅳ・Ⅴ群]

Ⅳ群にあたる93A区では、特にS X01に集中して墨書陶器が出土した。S X01は約7m×8m・深さ約1.1mの不定形な摺鉢状を呈した遺構で、煤が付着した多数の灰釉系陶器や焼けた河原石、さらに「南無大口」と表記した卒塔婆が出土した。灰釉系陶器は第3～10型式と幅広く出土しているが、Ⅰ～Ⅲ群と比較すると、第3～6型式の南部系の灰釉系陶器の占める割合が高い。Ⅲ群の墨書はその多くを占めるS X01内のものが焼けているためか、判読困難なものが多い。その中で明確に判読できるのが、灰釉系陶器の小皿の底部外面に見られる「まッ」という墨書である。これも、人名もしくはそれを省略したものであろうか。S X01は陶器等の廃棄の場であったが、単なる廃棄以外の祭祀的な目的をもった施設であった可能性が考えられる。「まッ」と墨書された灰釉系陶器の小皿は、直線距離で100m以上離れた94C c区のS K58でも出土したが、両者は同一人物の筆跡と思われる。93A区と94F区の間が調査できないため、墨書陶器の集中地点をⅣ群とⅤ群とに区別したが、「まッ」と墨書された墨書陶器が両群で出土したことや、両群に共通してやや早い年代の灰釉系陶器の占める割合が高いことから、Ⅳ群とⅤ群とに分けた区域を一つのまとまり、または日常的なつながりをもった区域と考えることもできる。

[その他]

Ⅰ～Ⅴの群に限定されず、遺跡全体をとおして出土している墨書陶器として、「十」をはじめとす

る数字、「○」をはじめとする記号を墨書したものがあつた。日常生活において、または祭祀・儀礼に際して、他と識別することを意図したものと思われる。漢字や平仮名を墨書したものについても、同様な意図から、半ば記号的に使用されたものも多いのではないかと考えられる。

さらに、「大」という墨書が灰釉及び灰釉系陶器に見られ、やはり遺跡全体をとおして出土している。吉祥句の一つであるか、大毛という地名にちなむ「大」であるかを判断するには、現段階では資料があまりに乏しい。

4. 墨書陶器からみた大毛沖遺跡

ここまで大毛沖遺跡で出土した墨書陶器の性格について、その形態及び出土した遺構・区域との関わりを中心に検討してきた。ここでそれらを総合することにより、出土した墨書陶器の空間的な広がりや時間的な変遷からみた大毛沖遺跡について整理しておきたい。

古代においては、「公」・「首」の文字を墨書した須恵器や灰釉陶器が出土したⅢ群の区域に、官衙との関係を有する可能性のある空間が存在したと考えられる。古代末期から中世にかけては、「大田」・「まつ」・「大」及び「の」・「悦」等の文字や、「○」等の記号を墨書した灰釉陶器や灰釉系陶器が出土した、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ群の区域に、農耕色の濃い生活空間が想定できる。さらに中世後半になると、花押風の墨書を出土したⅢ群の区域に、支配階層的な集団の居住空間を想定することができるのではないかと考える。

墨書陶器は、その多くが旧河道及びそれを区画する溝等から出土している。旧河道及びその周辺は、農耕等の祭祀の後、墨書陶器が投げ入れられた場、もしくは祭祀の場そのものとしての性格を有していると考えられる。周知のとおり、旧河道から墨書土器が集中的に出土する例は、伊場遺跡・勝

川遺跡等をはじめ各地で報告されており、祭祀との関わりが指摘される⁽⁵⁾。しかし、祭祀の形態をさらに明らかにするような、遺構・遺物の確認が待ち望まれる。

本遺跡で出土した墨書陶器は、墨書の内容及び陶(土)器の形態が多岐にわたっている。空間的・時間的な広がりに加え、社会階層間の広がりについても留意すべきであり、今後の検討課題としたい。

なお、本稿作成中に94G区において、旧河道内に集石と、その集石部分より呪符と思われる木片を検出・出土したことを、加えて報告しておきたい。旧河道及び大毛沖遺跡を考察する上で、注目すべき視点となろう。

末筆ながら本稿の作成にあたり、名古屋市博物館の下村信博氏、文化庁の斎藤孝正氏をはじめ、愛知県埋蔵文化財センター先学諸氏の貴重なご教示を得たことをここに記し、感謝申し上げたい。

註

- (1) 平川南、天野努、黒田正典「古代集落と墨書土器」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』(1989, 3)
- (2) 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」三重県埋蔵文化財センター『研究紀要第3号』(1994, 3)
- (3) 鬼頭清明『古代の村』(岩波書店)
- (4) 平川南「墨書土器とその字形」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』(1991, 11)
- (5) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編2』(1980)
愛知県埋蔵文化財センター『勝川遺跡Ⅳ』(1992)